

自記年譜

田中 敏

昭和十年（一九三五）

一月二十日群馬県前橋市に代々受け継がれた町医者の子三男として生まれた。父敏男は五代目である。初代の内田忠順は武士であったが、華岡青洲の門弟となり勉学の後前橋近郊の駒形郷に駒形医院を開業した。花柳病の専門医で、梅毒の特効薬を考案し、全国的に通信販売を行った。祖父の駒三郎が田中姓を継ぎ前橋へ移ってからも駒形医院の名称は継承された。母倭子は信州上田で倉庫・運送業を営む前田熊次郎の三女で、大正十三年東京女子医学専門学校（現東京女子医大）を卒業、至誠会附属病院に勤務、医専の創立者吉岡弥生の下で産科婦人科を学んだ後、敏男に嫁いだ。

昭和二十二年（一九四七）

群馬県立群馬師範学校附属小学校卒業。

昭和二十五年（一九五〇）

群馬大学附属中学校卒業。三年生の折、群馬県中学校英語弁論大会で第一位に入賞。

昭和二十八年（一九五三）

慶応義塾高等学校卒業。ピアノを井内澄子氏に師事。

昭和三十二年（一九五七）

慶応義塾大学経済学部卒業。

昭和三十二年（一九五七）～昭和三十九年（一九六四）

（株）群馬銀行本店営業部、東京支店勤務。

昭和三十四年（一九五九）

東京都出身で建築家の高木直幹の長女、英子と結婚。

昭和四十年（一九六五）～昭和四十二年（一九六七）

西ドイツ政府給費留学生として国立ミュンヘン・ゲーテ・インスティトゥート・ドイツ語師範科に留学、外国人ドイツ語教師の資格を取得。卒業論文は「ベートーヴェン―古典主義と浪漫主義の間で」。ドイツ留学中、密かな共産主義者（当時西ドイツでは共産主義は禁じられていた）で貴族趣味の孤高のピアニスト、ハンス・クライを知り、ピアノを師事するが、人生哲学に関して多大な影響を受ける。と同時に氏から西洋人の本音である西洋中心思想と、非西洋文化に対する傲岸不遜な優越感をつぶさに体験し激しい反撥を覚え、保守主義の愛国者となり、日本と日本文化の弁明（アポロギア）を生涯の仕事とすることを決意して帰国。昭和四十年長男一嘉誕生。

昭和四十二年（一九六七）

ゲーテ・インスティトゥート東京支部（東京ドイツ文化研究所）講師（至 昭和五十三年）。

昭和四十四年（一九六九）

明星大学一般教育（ドイツ語）専任講師。NHK国際局編成部嘱託（昭和四十五年～四十八年）・詩人高橋和子の詩集『パパとママ』（キリスト教出版社）をドイツ語に翻訳、西ドイツ・シュトゥットガルトのヴェスト社から“Papa und Mama”を出版。昭和四十四年に東京ドイツ文化会館の館長並びにゲーテ・インスティトゥート東京支部長

として赴任した作曲家のH・J・ケルロイターと同四十六年頃から個人的に親交を持つようになり、爾来氏からは芸術観に関して決定的な影響を受ける。氏は大戦中ナチスの文化政策に抗して反対運動のグループを組織したかどで追われる身となりブラジルに亡命した。ケルロイターもまた貴族趣味で共産主義者だったが、氏は西洋中心思想に懐疑的で、海外にドイツ語とドイツ文化を普及することを目的としたゲルテ・インステイトゥートの活動は異文化の侵略であると主張し、ゲルテ・インステイトゥートの抜本的な改革に努めた。

昭和四十八年（一九七三）

西ドイツ・シュトゥットガルト外国関係研究所の機関誌“Zeitschrift für Kulturaustausch”に「日本と西洋との対等な文化交流の難しさを論じた論文“Probleme deutsch-japanischer Zusammenarbeit”を發表。

昭和五十二年（一九七七）

明星大学一般教育（ドイツ語）教授。

昭和五十八年（一九八三）

ケルロイターと実際に交わした書簡を基にした日欧比較藝術論『西洋との対話』“Dialog mit dem Westen”（和・独文対照）を明星大学出版部から出版、この著作を契機にドイツ文学者で文明評論家の西尾幹二氏と知友の仲となり、以後数々の助言、助力を受ける。

昭和六十三年（一九八八）

独文の随筆集“Zwischen Ost und West”（東と西の間で）を出版（明星大学出版部）。

平成二年

西尾幹二氏の論文「ドイツ人の西欧中心主義と過去の克服」（中央公

論）をドイツ語に翻訳（“Der Eurozentrismus der Deutschen und ihre Vergangenheitsbewältigung”）、フンブルクのアジア研究所学会誌に掲載される。

平成三年（一九九一）

『和文独訳のサスペンサー翻訳の考え方』（共著者W・シュレヒト、白水社）を出版。論文“Bedeutung und Rolle der japanischen Teekunst in der modernen Welt”（現代の国際社会における茶の湯の意義と役割）を明星大学研究紀要、人文学部二十六号に発表。

平成四年（一九九二）

明星大学日本文化学部言語文化学科教授（日独比較文化、翻訳演習等担当）

ドイツ東洋文化研究協会（OAG）の第三回日本学会で“Auswirkungen der japanischen Ästhetik auf die Wirtschaft und Politik im heutigen Japan”（今日の日本の政治・経済に見られるへ日本の美学）と題して研究報告を行う。

平成六年（一九九四）

ドイツのウルム大学、アウグスブルク大学、ミュンヘン日独協会例会で“Was ist ein Kriterium der Japaner, das sich hinter ihrer Seele befindet und sie stützt”（日本文化の底を流れるもの）と題して講演を行う。

平成九年（一九九七）

ミュンヘン政治大学、アウグスブルク大学で“Japan im Zweiten Weltkrieg”（第二次世界大戦と日本）と題して講演を行う。

平成十年（一九九八）

論文「ドイツでぶつけてみた私の近現代史」「ナチスの亡霊が囁く日

本悪玉論」を夫々月刊誌『諸君!』(文藝春秋)平成十年一月号、二月号に発表。

論文「Gemacht oder geworden? — Überlegungen zur japanischen Kultur, Geschichte und Gesellschaft」(日本の文化、歴史、社会に見る〈する〉と〈なる〉)明星大学日本文化学部言語文化学科研究紀要六号に発表。

論文「Zu Prof. Iwabuchis japanischer Vergangenheitsbewältigung — eine Polemik」(岩淵達治学習院大学教授の論文「日本の過去の克服」に反論する)をドイツ東洋文化研究協会の月刊機関誌「OAG NOTIZEN 9/98」に発表。

ドイツ東洋文化研究協会主催の公開パネル・ディスカッション「ドイツと日本における〈過去の克服〉」(使用言語はドイツ語)にパネリストとして参加。

平成十一年(一九九九)

論文「偉っそうなドイツ人に告ぐ」を月刊誌『諸君!』(文藝春秋)六月号に発表。

平成十二年(二〇〇〇)

論文「誰が記憶の暗殺者か」を月刊誌『諸君!』(文藝春秋)十月号に発表。

平成十三年(二〇〇一)

現代ドイツを代表する作家マルティン・ヴァルザーをボードン湖畔の氏の自宅に訪問しインタビューする。(氏は、一九九八年平和賞受賞講演で、「アウシュヴィッツを、ドイツ人を威嚇するために振りかざしたり、何かを強いるための道徳的棍棒にしてはならない」と発言してドイツに大論争を巻き起こした。支那が「侵略と南京虐殺」を、韓

国が「植民地化」という誤った解釈もしくは虚構を棍棒にして日本を威嚇している現状に重ね合わせて氏の発言に共感を覚えたので直接会って話を聞くことにしたのである。)インタビューの一部始終は月刊誌『諸君!』七月号に「何時まで謝れというのか」と題して掲載された。

平成十五年(二〇〇三)

第二三回明星大学青梅校公開講座で「世界史における白人の犯罪——大東亜戦争に至る白人による植民地支配」と題して講演を行う。